

医学部長寄稿

大学院が生まれ変わります

医学部長 菅原和夫



周知のように来年度から大学院が生まれ変わります。具体的には、今までの大学院再編に当たり、弘前大学の生き残りに大学の整備は必須条件です。これまで医学部は大学院改革を最重要事項の一つと位置づけ不転の決意でこれを進めてまいりました。これまでの制度がある意味で一変するわけですから皆さんには十分ご理解をいただきます。この再編は以下の四点を目標としています。

一、医学研究と医療における国際性豊かな人材養成
二、高度で独創的な医学研究の推進
三、特徴のある高度医療の開発・展開
四、環境問題に対処する社会医学の充実

このように制度改革に伴い大学院共通教育の新設も行います。具体的には、今回の大学院再編に当たり、医学研究基礎技術実習を新たに追加しました。研究を実際に行うための基礎技術を集中的に身につけてもらうための実習コースです。さらに教育の範囲を広げた学際教育の充実も行われます。押し進められつつある北東北三大学連携に関連して、医学部ではその手始めとして大学院の連携を、入学試験に関する事項と学位認定に関する事項についてすでに秋田大学医学部と了解点に達しており、中期目標、中期計画に両大学とも盛り込みました。来年度からでも実施できるようすでに奥村学事委員長（弘前大学）と秋田大学医学部の担当委員との間で話し合いが始まっています。とりあえずは、

平成15年度／医学科

歳出予算配分決まる

医学科予算委員会委員 佐藤敬
(脳研脳血管病態部門教授)

平成15年度の予算配分案が七月十六日の医学科会議で承認された。医学科当初配分予算大綱の重要な点としては、全学予算としての教育研究活性化経費を確保するため、十五%が留保され（昨年度は五%）、本部運営費、共通事業費の供出額の増額（約四百万円）を合わせて、教育研究基盤校費配分総額が昨年度に比べ約四千円余りの減となった。

傾斜配分は昨年通り実施された。総額の三十%を傾斜配分とし、教育・研究・管理・運営の割合は四・四・二であった。その結果、各講座・部門当りの配分予算額は約二百二十一万円から三百二十万円の範囲となり、医学科配分総額の減少に伴って、講座・部門間の格差は昨年度に比べると小さくなった。昨年度の配分予算

学位認定に関する事項に関してだけでも早く始めたいと考えています。

すでに社会人入学、遠隔授業に関しては各々平成十年、十一年より実施されていますが、卒業後の二年間研修制度が実施されますと大学院への入学が実質二年間遅れることとなります。その時に定員の充足率を確保するためには、社会人入学と遠隔授業がその対策として大きな位置を占めることとなります。社会人入学を強く押し進めたいので、さらに教育の範囲を広げた学際教育の充実も行われます。押し進められつつある北東北三大学連携に関連して、

医学部ではその手始めとして大学院の連携を、入学試験に関する事項と学位認定に関する事項についてすでに秋田大学医学部と了解点に達しており、中期目標、中期計画に両大学とも盛り込みました。来年度からでも実施できるようすでに奥村学事委員長（弘前大学）と秋田大学医学部の担当委員との間で話し合いが始まっています。とりあえずは、

択になりました。来年度は何かとしてでも採択されるように頑張らなければなりません。大学院改革はまさにその一歩です。

遠藤前医学部長（現学長）時代より大学院の充実が図

られて七年経ちました。大学院の研究を中心とする右肩上がりになってきており、ここでもうひと頑張りというところまで来ました。何度か言うようですが研究

業績の向上のためには大学院の充実・向上以外考えられません。来年度より実施される新しい大学院制度を十分に理解していただき、我が医学部のさらなる発展のために頑張りましょう。

平成15年度

科学研究費補助金交付
医学部に総額一・五億円

平成15年度文部科学省・学術振興会科学研究費補助金の採択・交付が行われた。弘前大学医学部・附属病院では特定領域研究三件、基盤研究（B）十三件、萌芽研究（C）三十件、萌芽研究十九件、若手研究（B）十四件で、配分総額は一億五千六百八十万円であった（表1）。昨年度の配分額が一億七千五百二十万円であったのに比較すると、二十万円のダウンとなり、平成十三年度の一億五千四百八十万円と同程度であった。また、採択率でも平成十三年度二十七・三%、平成十四年度二十六・〇%と比べると、本年度は二十・七%と大きく減少した（表2）。東北地方の同規模国立大学医学部の採択・配分額の内訳を望まれる。（高垣記）

来年度からは弘前大学医学部も独立法人化され、科学研究費を初めとする外部資金獲得が私たちすべての研究者に共通の重要な課題となる。次年度申請に向けて、本学医学部の生き残りをかけて、更なる努力が望まれる。（高垣記）

表1 平成15年度 医学部・附属病院
科学研究費補助金内訳

(交付内定時)			
研究種目	申請件数	内定件数	交付内定額(千円)
特定領域研究	31	3	9,500
地域連携推進研究費	—	—	—
基盤研究(S)	2	0	0
基盤研究(A)	4	0	0
基盤研究(B)	82	13	48,200
基盤研究(C)	81	30	43,000
萌芽研究	136	19	31,400
若手研究(A)	8	0	0
若手研究(B)	38	14	24,700
合計	382	79	156,800

表2 東北地区医学部・附属病院申請・採択状況一覧

大学名	平成13年度					平成14年度					平成15年度				
	教官数	申請件数	申請率	内定件数	採択率	教官数	申請件数	申請率	内定件数	採択率	教官数	申請件数	申請率	内定件数	採択率
弘前大学	305	326	106.9%	89	27.3%	316	365	115.5%	95	26.0%	326	382	117.2%	79	20.7%
秋田大学	267	276	103.4%	90	32.6%	271	270	99.6%	92	34.1%	274	272	99.3%	98	36.0%
山形大学	261	291	111.5%	91	31.3%	256	269	105.1%	85	31.6%	257	264	102.7%	82	31.1%

研究室紹介

衛生学講座

衛生学は社会医学であり、予防医学、健康増進のための医学の分野でもある。したがって複雑化した社会構造に伴い年々その守備範囲は広がってきている。当衛生学講座の初代教授は高橋英次先生（一九四七年～一九五六年）、二代目はご存じの高血圧の疫学研究で名を馳せた佐々木直亮先生（一九五六年～一九八六年）で、今は三代目の菅原和夫（一九八六年より）である。

現在のスタッフは、菅原和夫（教授）、中路重之（助教）、梅田孝（助手）、鈴木克彦（助手）、竹島千秋（実験助手・技能補佐員）、小野美穂（学部長秘書）、福士めぐみ（教室秘書）、大学院生は珍田大輔（四年生）、小山隆男、高橋一平（二年生）、嶋谷泉（一年生）、社会人大学院生は、三浦雅史、吉岡美子（四年生）、医学部

研究生は、益子俊志（前早稲田大学ラグビー部監督）、山本洋祐（ソウルオリンピックメダリスト）、医学研究科研究生は持田典子（ソウルオリンピックメダリスト）、田辺勝（一九九五年福岡ユニバーシアード八十六キロ以下級優勝）、小嶋新太（二〇〇〇年全日本柔道選手権大会三位）、奥村俊樹（一九九八年アジア大会柔道競技七十一キロ以下級三位）のメンバーである。菅原教授が大分医科大学から当教室の教授に就任したのは一九八六年であるが、以後十八年の間に四十人以上の医学博士が誕生した。

研究は、大きなテーマとして「環境と適応」を掲げてきた。教授の菅原は、南極観測越冬隊参加（一年三ヶ月）、ペーリング海域で操業された母船式底引き網船団搭乗（六ヶ月）等まさに自らの手で「適応」の実践をなしてきた。今教室の研究ではそれがいくつかに派生している。一言で述べれば、「好中球の機能を指標とした種々の生体適応の研究」となるが、スポーツ選手を対象とした種々の生体負担下での適応、また栄養とそれに対する適応など、多岐にわたる。教室で開発した九十六検体同時測定可能なフォトリカウンター（USO・800）で好中球が産生する活性酸素種の多検体迅速測定を行えるようになり本研究はブレイクした。その後、加えてフローサイトメーターを用いた好中球の活性酸素産生能及び食食能の測定が実現し幅が広がった。また、関連因子として種々のサイトカインの測定も同時に行い、スポーツ、運動負荷に関連した好中球機能の分野では世界のトップランナーと自負している。この他に、食物繊維と各種疾病に関する実験的、疫学的研究を進めている。食物繊維は非栄養素であり、栄養素一辺倒であったこれまでの栄養学によってもたらされた負の遺産、肥満、高脂血症の増加と相まって栄養学の分野に一石を投じた。平成六年の「第六次改定日本人の栄養所要量」のなかで初めて策定された食物繊維の目標摂取量（成人一名当たり二十～二十五グラム）の原案作成に関わった。また、種々の疫学調査・研究も行っている。また第一内科との共同研究でヘリコバクターピロリと各種関連疾患との疫学研究、及び同菌の好中球活性酸素産生能に及ぼす影響に関する研究も行っている。

教育としては、教官による講義に加えて、非常勤講師による多岐にわたる講義を行っている。石戸谷欣一先生「津軽弁と医療」（鶴桜会理事長）、池口恵観先生「医の倫理」（鳥帽子山最福寺法主）、櫻井裕先生「疫学」（防衛医科大学校衛生学講座）

教授）、青木慎一郎先生「社会福祉」（岩手県立大学教授）、戸塚孝先生「スポーツ医学」（本学教育学部保健体育助教授）、大井田隆先生「保健・医療システム」（日本大学公衆衛生学講座教授、等である。この他社会医学実習がある。これは学生に研究の立案とデータ収集を行わせ、研究として一つの形にまとめ上げるといふ実習である。社会医学の教室であることにより社会貢献の機会も多い。青森県が行っている種々の医療・保健活動（地域包括ケア、がん登録、県民栄養調査等の各種委員会、青森県体育協会の各種事業（医科学委員会、アドバイザー・事業等）にも積極的に携わっている。また体育協会のジュニア選手強化の一環として、最大酸素摂取量測定等の運動能力の評価をクロスカントリー・スキー選手、スケート選手を対象に行ったこともある。今後は日本一短い青森県の平均寿命改善のために、社会医学の教室としてますます尽力していく所存である。

基礎の各教室（講座）・部門、保健学科、事務部では恒例の親善ソフトボール大会があるが、我が衛生学を中心とした六階連合チームは常勝集団と言われて他チームの目標となっている。とくに、梅田孝助手、戸塚孝非常勤講師はセミプロの域に達しその存在だけで「チヨンボ」と言われている。かつては単独参加していた第一生化学がどうしても六階連合に歯が立たず「いかに六階を打倒するか」を教室のテーマにしていたとのまことしやかな話すらある。ただスポーツ医学を標榜する教室としては常勝は当然なのかもしれない。しかし、近年主力選手の加齢にともない年々「しんどい」優勝が続いている。そろそろ五階連合にその地位を譲る日が近づいているのかもしれない。

当教室で主宰している全国学会がある。それは「体力・栄養・免疫学会」と称し、菅原教授と故三島昌夫先生（元国立公衆衛生院労働衛生学部長・職業性疾患室長）により創設された会員数約二百五十名の全国学会である。体力・栄養・免疫のキーワードに沿えば何でもありの学会で、毎年総会（大会）を夏に開催している。今年八月下旬に金沢大学医学部で開催された第十三回目となる。自由闊達な議論を旨とし、そのためには学会中に飲酒も認めようという議論がまじめに行われたことがある。構成は全国のいづれの施設を問わないが、主力メンバーは弘前大学のほかに、早稲田大学、日本体育大学、金沢大学、国立健康栄養研究所、防衛医科大学校、大分医科大学、日

本文理大学、長崎大学、女子栄養大学、東京医大、山口東京理科大学等である。また、毎年二・三号の機関誌「体力・栄養・免疫学雑誌」を発行している。フィールド活動として日本体育大学柔道部・相撲部、早稲田大学ラグビー部、別府大分毎日マラソンなどを開催している。かつては夏の高校野球選手権大会、全日本バドミントン合宿等のフィールドも持っていた。高校時代の松井秀喜（野球）、中学時代の高見盛（相撲）、現役時代の陣内貴美子（バドミントン）、古賀稔彦（柔道）等の調査も行った。全日本のバドミントン女子チームの強化合宿が箱根で持たれ、中路の採血が痛いという理由で選手がボイコットし、それを説得するため一週間晩み合ったという辛くも懐かしい思い出もある。フィールドと遠来の研究生が多いため教室員の上京と遠来の客の訪問が絶えず忙しい。将来的にはこのようなスポーツ分野に限らず、一般地域でのフィールドを持つ必要があると痛感している。

教室のモットーはあえて掲げているわけではないが、一言で言えば明るさとチームワークであろうか。教授の菅原は生来のスポーツマンであり、弘前大学医学部陸上部を学生時代に創設し、みずからも四百メートル走で東医体大活躍の実績を持つ。細かいことにこだわらず部下の活動を黙って「見守る」というスタンスを貫いており、その気風が教授就任十八年を経過した今、教室員に染み付いている。したがって意味不明とも言える懇親のための飲み会も多く、これがまた楽しい。

現在、医師の社会進出は必ずしも芳しくない。そのような状況で医師そのものの社会的地位も年々地盤沈下してきている。社会医学を志す若き医師がもっと増え、多くの卒業生が当教室の門を叩く日が近いことを祈っている。（文責 中路重之）



2001年8月 東京の国立公衆衛生院で行われた第11回体力・栄養・免疫学会にて

博士が誕生した。研究は、大きなテーマとして「環境と適応」を掲げてきた。教授の菅原は、南極観測越冬隊参加（一年三ヶ月）、ペーリング海域で操業された母船式底引き網船団搭乗（六ヶ月）等まさに自らの手で「適応」の実践をなしてきた。今教室の研究ではそれがいくつかに派生している。一言で述べれば、「好中球の機能を指標とした種々の生体適応の研究」となるが、スポーツ選手を対象とした種々の生体負担下での適応、また栄養とそれに対する適応など、多岐にわたる。教室で開発した九十六検体同時測定可能なフォトリカウンター（USO・800）で好中球が産生する活性酸素種の多検体迅速測定を行えるようになり本研究はブレイクした。その後、加えてフローサイトメーターを用いた好中球の活性酸素産生能及び食食能の測定が実現し幅が広がった。また、関連因子として種々のサイトカインの測定も同時に行い、スポーツ、運動負荷に関連した好中球機能の分野では世界のトップランナーと自負している。この他に、食物繊維と各種疾病に関する実験的、疫学的研究を進めている。食物繊維は非栄養素であり、栄養素一辺倒であったこれまでの栄養学によってもたらされた負の遺産、肥満、高脂血症の増加と相まって栄養学の分野に一石を投じた。平成六年の「第六次改定日本人の栄養所要量」のなかで初めて策定された食物繊維の目標摂取量（成人一名当たり二十～二十五グラム）の原案作成に関わった。また、種々の疫学調査・研究も行っている。また第一内科との共同研究でヘリコバクターピロリと各種関連疾患との疫学研究、及び同菌の好中球活性酸素産生能に及ぼす影響に関する研究も行っている。

教育としては、教官による講義に加えて、非常勤講師による多岐にわたる講義を行っている。石戸谷欣一先生「津軽弁と医療」（鶴桜会理事長）、池口恵観先生「医の倫理」（鳥帽子山最福寺法主）、櫻井裕先生「疫学」（防衛医科大学校衛生学講座）

教授）、青木慎一郎先生「社会福祉」（岩手県立大学教授）、戸塚孝先生「スポーツ医学」（本学教育学部保健体育助教授）、大井田隆先生「保健・医療システム」（日本大学公衆衛生学講座教授、等である。この他社会医学実習がある。これは学生に研究の立案とデータ収集を行わせ、研究として一つの形にまとめ上げるといふ実習である。社会医学の教室であることにより社会貢献の機会も多い。青森県が行っている種々の医療・保健活動（地域包括ケア、がん登録、県民栄養調査等の各種委員会、青森県体育協会の各種事業（医科学委員会、アドバイザー・事業等）にも積極的に携わっている。また体育協会のジュニア選手強化の一環として、最大酸素摂取量測定等の運動能力の評価をクロスカントリー・スキー選手、スケート選手を対象に行ったこともある。今後は日本一短い青森県の平均寿命改善のために、社会医学の教室としてますます尽力していく所存である。

基礎の各教室（講座）・部門、保健学科、事務部では恒例の親善ソフトボール大会があるが、我が衛生学を中心とした六階連合チームは常勝集団と言われて他チームの目標となっている。とくに、梅田孝助手、戸塚孝非常勤講師はセミプロの域に達しその存在だけで「チヨンボ」と言われている。かつては単独参加していた第一生化学がどうしても六階連合に歯が立たず「いかに六階を打倒するか」を教室のテーマにしていたとのまことしやかな話すらある。ただスポーツ医学を標榜する教室としては常勝は当然なのかもしれない。しかし、近年主力選手の加齢にともない年々「しんどい」優勝が続いている。そろそろ五階連合にその地位を譲る日が近づいているのかもしれない。

当教室で主宰している全国学会がある。それは「体力・栄養・免疫学会」と称し、菅原教授と故三島昌夫先生（元国立公衆衛生院労働衛生学部長・職業性疾患室長）により創設された会員数約二百五十名の全国学会である。体力・栄養・免疫のキーワードに沿えば何でもありの学会で、毎年総会（大会）を夏に開催している。今年八月下旬に金沢大学医学部で開催された第十三回目となる。自由闊達な議論を旨とし、そのためには学会中に飲酒も認めようという議論がまじめに行われたことがある。構成は全国のいづれの施設を問わないが、主力メンバーは弘前大学のほかに、早稲田大学、日本体育大学、金沢大学、国立健康栄養研究所、防衛医科大学校、大分医科大学、日

本文理大学、長崎大学、女子栄養大学、東京医大、山口東京理科大学等である。また、毎年二・三号の機関誌「体力・栄養・免疫学雑誌」を発行している。フィールド活動として日本体育大学柔道部・相撲部、早稲田大学ラグビー部、別府大分毎日マラソンなどを開催している。かつては夏の高校野球選手権大会、全日本バドミントン合宿等のフィールドも持っていた。高校時代の松井秀喜（野球）、中学時代の高見盛（相撲）、現役時代の陣内貴美子（バドミントン）、古賀稔彦（柔道）等の調査も行った。全日本のバドミントン女子チームの強化合宿が箱根で持たれ、中路の採血が痛いという理由で選手がボイコットし、それを説得するため一週間晩み合ったという辛くも懐かしい思い出もある。フィールドと遠来の研究生が多いため教室員の上京と遠来の客の訪問が絶えず忙しい。将来的にはこのようなスポーツ分野に限らず、一般地域でのフィールドを持つ必要があると痛感している。

教室のモットーはあえて掲げているわけではないが、一言で言えば明るさとチームワークであろうか。教授の菅原は生来のスポーツマンであり、弘前大学医学部陸上部を学生時代に創設し、みずからも四百メートル走で東医体大活躍の実績を持つ。細かいことにこだわらず部下の活動を黙って「見守る」というスタンスを貫いており、その気風が教授就任十八年を経過した今、教室員に染み付いている。したがって意味不明とも言える懇親のための飲み会も多く、これがまた楽しい。

現在、医師の社会進出は必ずしも芳しくない。そのような状況で医師そのものの社会的地位も年々地盤沈下してきている。社会医学を志す若き医師がもっと増え、多くの卒業生が当教室の門を叩く日が近いことを祈っている。（文責 中路重之）

図書館だより

附属図書館医学部分館の土曜日開館（有人）を始めました。

附属図書館医学部分館長 正村和彦

これまで土曜日の開館は無人で各講座／部門に配付されたカードでの入館のみが可能で、貸し出しはできませんでした。また学部学生および一般の方は入館できませんでしたが、本年度の社団法人青森医学振興会の助成により、七月二十六日から土曜日の有人開館が可能となりました。この実現

は事務および図書館の方々の努力のおかげです。すでに、土曜日開館の詳しいお知らせは各講座／部門に配付してありますが、有人開館ですと、これまでよりも多くのの方に御利用いただけるので、以下に利用方法、変更点を記します。現在、土曜日の利用頻度をモニターしています。多くの方の利用により図書館の発

展がありますのでよろしくお願いたします。

開館時間
十時〇〇分～十七時〇〇分（土曜日のみ）。九時〇〇分～十時〇〇分までの一時間は従来通り、入館カードでの入館です。

改善点
（一）図書／雑誌の貸し出しができます。
（二）雑誌および蔵書の検索パソコンの利用ができます。
（三）学生および一般市民の方も利用できます。

チュートリアル教育の導入から半年

チュートリアル教育実施委員会

委員長 中 根 明 夫(細菌学講座教授)

平成十五年度からチュートリアル教育が導入され、前期の授業が終了しました。前期延べ七十名の先生方がチュートリアルとして、チュートリアル授業を担当していただきました。まず、担当の先生方にお礼申し上げます。紙面を借り、チュートリアル授業の前期の報告と問題点、チュートリアル教育実施委員会(以下「委員会」と略します)の活動について述べます。

一、チュートリアル授業のすべり出しは順調でした

昨年十一月にチュートリアル教育のFDを行い、導入に向けてのさまざまな準備を整え、本年四月のチュートリアル授業開始を迎えました。第一クールのチュートリアルは委員が担当し、学生の反応を見ましたが、予想していた以上に学生の反応がよく、胸をなで下ろしました。第二クール以降は、基礎・臨床を問わず多くの先生方にチュートリアルになっていただき、心配していたような運営上の大きなトラブルもなく前期の授業を終了しました。前期に使用したシナリオ七本は、委員会メンバーのオリジナルシナリオで、「貧血」「狂牛病」「ゲノム」「パニック症候群」「覚醒剤」「C型肝炎」「皮膚疾患」といったテーマで行いました。学生は基礎的な内容のシナリオよりは臨床的、特に診断を求めるようなシナリオに興味を感じたようです。

二、チュートリアルと学生間の相互評価を行っています

学生の評価は、出席三十点・授業状況三十点・レポート四十点の配分で、すべて担当チュートリアルにより評

価を行ってまいりました。チュートリアル間の評価数値のばらつきは多少ありましたが、委員会の解析では、特定の学生に不利になるような評価ではないことが分かりました。授業状況の評価結果とレポート評価結果は、必ずしも並行せず、授業状況の評価が他の科目の成績と相関しているような印象を持ちました。従って、チュートリアルの授業評価が重要であると考えています。一方、学生からチュートリアルを評価した結果では、チュートリアルによってかなり学生による評価が分かれました。特にチュートリアルが司会役となってしまう場合は評価が低いようです。かといって、ほとんど口を開かないチュートリアルも「チュートリアルの意味がない」との評価を

受けてしまっています。学生からのチュートリアルやシナリオに対する意見は、改善策を考える上で大いに参考になりました。

三、委員会は働いています

チュートリアル授業開始後も毎月一回委員会を開いてさまざまなことを検討しています。各クールに委員最低一名がチュートリアルに加わり、各クールのチュートリアル会議の議長として、担当クールの運営を行っています。また、万が一何らかの理由で突然チュートリアルが授業を担当できない場合を想定し、委員の中から予備要員を決め、待機してもらっています。各クール担当委員の話や各クールの学生によるチュートリアルおよびシナリオに対する意見をもとに、

委員会では改善策を話し合っています。また、重要な仕事として、FDの時、皆様に作成していただいたシナリオを作者に完成していただき、さらに委員がブラッシュアップし、シナリオをストックしています。

四、後期のチュートリアル授業は改善する必要があります

最初に「チュートリアル授業のすべり出しは順調でした」と書きました。しかし、さまざまな問題も浮かび上がってきました。開始前に杞憂していた「慣れによる授業に対する真剣さの低下」がみられてきました。その結果、なるべく早く授業を切り上げようとする傾向が学生側に見られるようになりました。また、抽出項目について調べた内容を発表するだけで、チュートリアル授業の目的の一つである「ディベート」にほど遠い内容であることも問題です。多くの学生が「いか

に、簡単に済ませようか」という考えのように見えます。大きな問題です。その一方で、自学自習をしつかりやりたい学生にとっても「勉強がなかなかできない」という悩みもしばしば書かれます。それは、「図書館の本、特に新しい本が少なく、先に借りられてしまうと、見ることができない」「インターネットで資料を調べたいけれど、土日がコンピュータ室に入れない」「割り当てのプリントアウト枚数が少なく、プリントアウトもままならない」など、ハードウェアの不足のために、学習意欲をそがれることもあるようです。

前期授業終了後、委員と学生の有志で懇談会を持ち、

医学部医学科 学部説明会開催さる

熱心に聴き入る高校生



元村教授の説明に熱心に聴き入る高校生たち

高校三年生を対象とした本学医学部医学科の平成十五年度説明会が八月七日午後一時から開催された。臨床大講堂には昼過ぎから真剣な眼差しで高校生とその母親合わせて約百十名が集まり、開催時刻を待った。説明会ではまず、司会の泉井教授から開会の言葉があった後、学務主任の元村教授が出張で不在だった菅原学部長に代わって挨拶を述べた。そ

の後、元村教授が引き続き本学医学科での最近の改革の成果を紹介し、さらに入学後に受けることになる医学科での六年一貫教育の流れをフロッチャートで示した。高校生たちは実習風景や授業風景などの写真を興味深そうに見入っていたが、引き続き行われた佐々木教授の三十分模擬講義「生体肝移植」では、さながら本



佐々木教授の講義風景

また、講義終了後には「出血はどのように止めるのか」とか「ドナーの肝臓を半分切除した後のスペースはどうなるのか」などというかなり突っ込んだ質問が出て、佐々木教授を感心させていた。その後、手術部でのビデオによる手術模様紹介、薬剤部での業務内容の見学および脳血管病態部門のレーザー顕微鏡の見学という三つのコースに分かれ、全員がそれぞれをローテーションしながら施設見学を行った。最後に再び臨床大講義室に集合して意見交換とアンケートが回収され、午後四時に散会となった。(中澤 記)

学生にさまざまな問題点を指摘してもらいました。現在、後期授業に向けて、授業のやり方の変更を前提とした改善策を検討しています。

五、先生方をお願いします

前期にチュートリアルをやっていた先生方に感謝しています。多くの先生が熱心に取り組んでいると学生は評価しています。しかし、時に直前に授業をキャンセルしたり、授業を忘れ

て来ない先生もいました。まだまだチュートリアル教育に対する認識が低いのかと、複雑な気持ちです。講義を担当するとまったく同じ認識をしていただきたいと思っています。

これからはチュートリアル授業は続きます。先生方の協力なしに運営は不可能です。基礎・臨床を問わず、多くの先生方にチュートリアルを経験していただければ、チュートリアル教育に対する理解も得られると期待しています。また、現在の授

業は「発展途上」の段階です。より良いチュートリアル教育を学生に提供するための、助言や苦言を委員会に寄せていただければ幸いです。

同様に学生諸君にも、チュートリアル授業に真摯に臨んで欲しいし、質の高い教育を受けるための意見や苦言を遠慮なく言って欲しいと思います。我々と一緒に弘前大学医学部独特のチュートリアル教育の体系を創造していきましょう!

第46回 東医体

結果速報

東医体理事 佐藤 敬
(脳研脳血管病態部門教授)

今年の東医体は四十六回目を数え、山梨大学、東邦大学、東京医科大学、慶応大学の主管によって、関東地区を中心に行われた。種目によっては、七月二十九日から開催され、八月十五日までには全種目を終えた。

今年も弘前大学医学部の活躍は目覚ましいものがあり、現在判明しているものだけで、ラグビー、準硬式野球、空手男子で弘前大学医学部が優勝した。ラグビー部は決勝で慈恵医大を十七対〇で破り、五連覇を達成、準硬式野球部は雨のために全試合を消化できず四校同時優勝(弘前、札幌、北大、山梨)となったものの四連覇を遂げた。男子空手部は団体組、団体型、個人組(花田賢二君)の三種目に優勝し、個人型は二位(浅利亨君)であった。このほかに、柔道部は無差別級

佐々木英嗣君が個人優勝、軽量級井上亮君が個人準優勝、女子テニス部は団体準優勝を収めた。

これらは一部に過ぎず、全種目の結果と夏季大会総合成績は次号で詳しく報告する。

平成15年度

学士編入学学生は

医学の勉強に苦しみ

かつ楽しんだ

大久保隆史

学士編入という形で二度目の大学生活がスタートした。とにかく授業で与えられる情報量が多い、という事に全ての感想が集約される。

一年前迄は事務職として企業勤めをし、自分の中に既にあるものをアウトプットとして吐き出す作業を繰り返してきていた。そのような体で、ここにきて急激な情報の洪水に晒された結果、未だに戸惑いが抜け切れていないというのが現状である。しかしその一方で、そ

藤田和歌子

藤田和歌子さんは、夏休みに入るとすぐにアメリカに行ってしまう、日本語の使えるワープロが無く、英文で送ってきましたので原文のまま掲載します。

time studying, my brain capacity seemed so limited that old information was escaping as new information was coming in. This was frustrating.

Having received higher education from different universities in the US, I have a tendency to compare systems between Japan and the US. A reversed culture shock---this is what I have been experiencing. There are three aspects that I feel are particularly strange about this medical school. First of all, the fact that students can arrange their own exam schedules to facilitate their participation in club activities they seem to prioritize. Secondly, the fact that old exams circulate among certain groups of students gives these groups an unfair advantage with respect to the remaining student body. I myself have been forced to play this game and, perhaps, benefited from it, but it is very unpleasant to have to go around begging other students for material that should be universally available. In the United States, everyone(not a few selected students) has access to old exams because they are either stored in the library or posted in the professor's website. Lastly, the existence of student organizations, called exam

基礎ソフトボール大会

熱戦二十一試合が行われる

第二十五回学部長杯争奪基礎教員・学生ソフトボール大会は、五月十三日に開幕しました。今年は、医学科基礎医学講座から数人の教員が移動した保健学科検査技術科学チームが新たに参加して、七チームによる総当たり戦で二十一試合が行われました。天候にも恵まれ、七月二日に全試合が終了しました。成績は以下のとおりでした。

優勝は六階連合(五勝一敗)、準優勝は細菌/法医/解剖/動物舎連合(四勝二敗)、三位・四階連合(四勝二敗)、四位・二階連合(三勝三敗)、五位・事務/図書館連合(二勝四敗)、六位・検査技術科学(二勝四敗)、七位・脳研(一勝五敗)でした。

七月十八日に表彰式および懇親会が行われ、出張中の菅原医学部長に代わって神谷教授から各チームに表彰状と記念品が、また、各

試合で一名ずつ推薦された優秀選手には泉井教授から賞状と記念品が手渡されました。小山選手(六階連合)、菅野選手(四階連合)、後藤選手(事務/図書館連合)の三選手が二試合で優秀選手に推薦され、最優秀選手に選ばれました。最後に来年の幹事担当の二階連合を代表して土田教授から挨拶があり、閉会となりました。

爽やかな初夏のグラウンドで汗を流したことは、とても気持ちが良く、日頃、教育・研究・事務などで忙しかったストレスを発散するいい機会であったと思います。また、近くて遠い(?)職場の仲間や学生がソフトボールを通じて親睦を深めることができたので



最終戦の四階連合対二階連合
投手は山崎選手(二階)、打者は菅野選手(四階)

三月末、それまでお世話になった先生、友人と別れを惜しみつつ、故郷弘前に戻ってきた。私はどちらかというと環境が変わる時、期待よりも不安が大きいのだが今回は違っていた。学業に対する不安はもちろんあったのだが、それ以上に先生方、仲間との出会いの期待が大きかった。

オリエンテーション、驚きの歓迎会を経て初講義へ。他の学士編入者、同級生となる二年、三年生との出会いは大いに刺激になった。出会いの喜びと学業の不安

My first semester in medical school is finally over or should I say, "I survived the first semester?" I jumped into the plane and came back to the United States(Yes, my second home) right after taking my last exam before the summer break. I could not wait to see those blue skies, sandy beaches, and palm trees of Los Angeles, California. It would have been nice to forget about studying for a while and enjoy my vacation but unfortunately that cannot be. There are more exams to take in September. I drag myself to the UCLA biomedical library everyday as usual.

Struggle is the best word that describes my life as a medical student. After having obtained two master's degrees in International Educational Development and Public Health, I finally discovered what I wanted to be. My ultimate desire is to become a medical doctor and provide care for underserved populations.

Hirosaki University gave me a chance to study medicine so I left the United States in March and moved to Hirosaki. My physician friends had made me aware of the demanding curriculum and the possible stress. I felt mentally and physically ready to take this challenge. But soon after classes began, I was completely overwhelmed by the amount of new information that had to be digested. Fun activities like movies, concerts, shopping etc. have vanished from my life. I had never studied so much in my life. Even though I spent an enormous amount of

planning committees, that are responsible for negotiating with professors when exams will take place and even, sometimes, the subjects that will be on the exam. Why can't professors give out exam information to everyone during the class? This would prevent any student from being left out of the loop. I often received e-mails from students containing exam information a night before the exam. Sure, something is better than nothing but it would be helpful to know the necessary information at least one week before the exam. There is a proverb saying "When in Rome, do as the Romans do" and I have to remind myself of this proverb often. That is just the way it is. But wait...shouldn't we all have access to the necessary information equally?

On the good side, it is very positive, in my opinion, that the school has tried to "open up" to more experienced students with this new program however demanding it is turning out to be.

The first semester was a challenging one. My passion for medicine kept me moving me forward and, in spite of all my criticisms, I would like to thank professors who were constantly caring for us by spending a lot of time answering questions outside of their office hours and who kept encouraging us. I would also like to thank all my classmates and friends who were always supportive.

「ジャマイカ国南部地域保健強化プロジェクト」を終えて

公衆衛生学講座教授 三 田 禮 造

一九九八年六月から始まった「ジャマイカ国南部地域保健強化プロジェクト」は五月三十一日終了しました。

Projectは一九九七年四月の事前調査団に始まり、長期調査団、実施協議調査団と三度の調査団が派遣されました。弘前大学医学部からは長期専門家であるチーフアドバイザー四名、検診専門家四名が派遣され、また短期専門家は附属病院、保健学科、教育学部の協力を得て十四名が派遣されました（何れも延べ人数）。期間中専門家住宅に鉄格子を破った空き巣狙いに入られる事故が一件ありましたが、幸い専門家本人及び家族が危害を受けるような事件はありませんでした。ちなみに人口二百五十万人の国で昨年一年間に千四十二人が

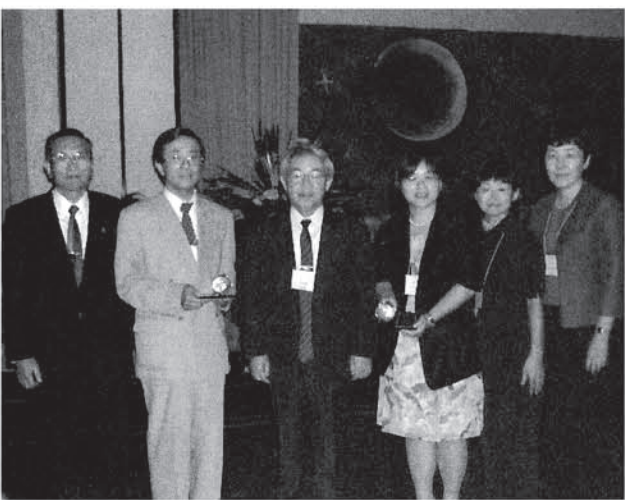
殺されております。

Projectの具体的活動は、生活習慣病予防検診systemの構築、検診技術の移転、健康教育技術の移転、教材作成能力の向上の支援、検診結果の保存・有効活用法の指導等です。

健診は身長・体重・血圧測定、尿検査、血糖・コレステロール測定、心電図検査であり基本的な内容です。ジャマイカでは地域住民を対象とした検診活動は行なわれておらず、自分の身長や体重は保健センターの職員ですら知りませんでした。四輪駆動のミニバスによる巡回検診(Mobile Clinic)は山間部の悪路をもとにもせず集落を回り、時には一日四十人以上を検診するなどの成果を上げました。保



検診スタッフと一緒にMobile Clinicの際に撮ったものです。



Jamaica/Japan International Health and Lifestyle Conference-2003にて左から三田、佐藤教授、大塚大使、北窓次長（青森県健康福祉部）、吉田保健師及び宮本調整員。佐藤教授及び北窓次長はJamaicaからの記念のクリスタルを持っています。

今年の二月にはproject活動の成果を国内外に波及すべく「Jamaica/Japan International Health and Lifestyle Conference-2003」が開催されました。佐藤教授、青森県健康福祉部北窓次長の講演も行なわれ、カリブ諸国十二カ国から参加があり、成功裡に終わる事が出来ました。Project開始に際し我々が二千名に行なった生活習慣に関する調査は(People's

Awareness and Behaviour Survey) Jamaica人の生活意識や生活習慣を知る上で貴重な資料として、Pan American Health Organizationから評価を得ていると聞いております。同様調査はproject終了時再度実施し、間もなく報告書が出る事になっております。Projectは終了しましたが、今後はJamaica保健省がJICAの支援を受け、カリブ諸国を対象とした生活習慣病予防研修会を開催する予定です(第三国研修)。弘前大学としても引き続き協力して行く事になるでしょう。

●平成十四年度青森銀行研究助成研究班「脳血管障害」発表会

研究班班長 佐藤 敬(脳研脳血管病態部門教授)

平成十二年度から、青森銀行による研究助成を受けて「脳血管障害」の研究班が組織され、昨年度をもつて三年間の研究が終了した。この研究班は脳研四部門と解剖学第一、公衆衛生学、脳神経外科の七研究グループが参加して結成され、助成金の総額は三年間で二千四百万円であった。平成十二年度の成果発表会も行われ、報告書が公表されたが、十三年度の成果発表会は、同研究班が中心となつて主催した弘前国際医学フォーラム第六回学術集会「脳血管障害と神経変性」の中で行われ、研究成果は同フォーラムの記録集「Advances in Brain Research: Cerebrovascular Disorders and Neurodegeneration」(Excerpta Medica, International Congress Series 1251)として出版された。

今回はこれまでの研究全体の総括を行う発表会として企画され、平成十五年八月五日(火)十四時から十七時まで、メディカルコミュニケーションセンターで行われた。当日のプログラムは表の通りで、予定を越えて熱心なディスカッションが持たれた。本研究班はこれをもって解散ということになったが、脳血管障害は高齢化社会の重要な研究課題であり、これからも同グループを中心に共同研究を進める予定である。この場を借りて、多大な助成を頂いた青森銀行の関係者に感謝するとともに、学内の諸先生のご理解・ご協力に感謝し、今後ともわれわれ研究グループ

アルジェリア地震の援助活動

公衆衛生学講座助成教授 朝田茂樹



二〇〇三年五月二十一日アルジェリア北部をリヒター一六・七の地震が襲い、二千二百六十六名の死者、一万二千六百六十一名の負傷者、十五万人の被災者が発生した。日本政府は直後に人命救助を目的とした国際緊急援助隊救助チーム、及び被災民医療を担当する二十一名の医療チームの派遣を決定した。外務省とJICAの要請により医療チームの副団長(医療総括)として参加した。大地震救済への現場出場は一九九二年のニカラガ地震・津波、一九九五年の阪神淡路大震災以来三回目である。今回、医療統括としての



任務は、現地医療レベルを見極め被災民のニーズに応える医療サービスの提供、アルジェリア国保健省との交渉、そして公衆衛生活動の展開であった。四十八時間以内出発の原則から派遣要請を受けた翌日二十五日夜に成田で結団式を経て出発、二十六日の午後には震源地近くの被災地を視察。全崩壊した病院近くのサッカー場内に日本から持参した六張りのテントで診療を開始した。医療チーム二十一名の内訳は、外務省の団長一名、副団長二名(医療統括とJICA業務統括)、医師三名(救急医二名、小児科一名)、薬剤師一名、救急救命士二名、看護師七名、業務調整四名、評価一名である。手足の外傷、感染創、上気道炎、ストレスによる急性胃炎など臨床科目で見ると十科目に相当する被災民を診療した。リヒター五・七の最大余震が発生した夜には救急医を主体とした夜間診療も施行し、最終の六月五日まで千六百二十八名の患者さんを診療した。それに加えて簡易トイレ増設の設計案提示、個人衛生の重要性を知らせるアラビア語のチラシ作成、手洗いやうがい用のデモンストレーション、害虫の駆除、栄養指導、救護者や支援者の健康管理などの公衆衛生活動も意識的に広く展開した。医療器材と薬品引渡し最終日にはアルジェリア国保健省から感謝状と記念の盾が授与された。今回の緊急援助活動参加には、休日にも拘わらず派遣手続きを進めてくれた坂野助手と事務官の方々、海外派遣を快くご承諾頂いた菅原医学部長、遠藤学長の存在があり感謝します。



に対するご支援をお願いする次第です。

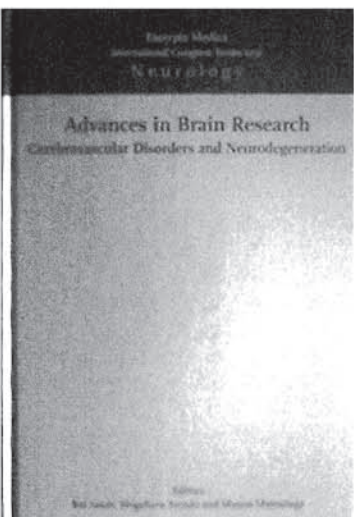
《平成 14 年度研究発表会プログラム》

日時：平成 15 年 8 月 5 日 (火)

会場：弘前大学医学部
メディカルコミュニケーションセンター
大会議室

1. 非ヘム鉄の組織化学と疾患の原因解明への応用
目黒玲子、浅野義哉、正村和彦(解剖学第一)
2. 青森県内脳卒中の実態と予防の課題
朝日茂樹、三田禮造、坂野昌司(公衆衛生学)
3. クモ膜下出血後に発生する脳血管攣縮の病態と治療に関する研究
大熊洋輝、鈴木重晴、鶴谷尚信、Md Shafiqul Islam、吉川朋成(脳神経外科)
4. 後頭蓋窩脳血管障害の病態：経時的検討
松永宗雄、富山誠彦(脳神経統御部門)
5. 脳虚血ならびに低酸素によるアストロサイトにおけるメタロチオネイン-3の発現亢進と細胞死の抑制
森文秋¹、丹治邦和¹、入江祥史²、佐藤敬³、若林孝一¹
(¹弘前大学医学部 脳神経血管病態研究施設 分子病態部門、²弘前大学医学部材料部、³弘前大学医学部脳神経血管病態研究施設 脳血管病態部門)
6. 脳血管障害関連刺激による培養ヒトアストロサイトにおける遺伝子発現の検討
吉田秀見、今泉忠淳、佐藤敬(弘前大学医学部附属脳神経血管病態研究施設 脳血管病態部門)

出版された。今回はこれまでの研究全体の総括を行う発表会として企画され、平成十五年八月五日(火)十四時から十七時まで、メディカルコミュニケーションセンターで行われた。当日のプログラムは表の通りで、予定を越えて熱心なディスカッションが持たれた。本研究班はこれをもって解散ということになったが、脳血管障害は高齢化社会の重要な研究課題であり、これからも同グループを中心に共同研究を進める予定である。この場を借りて、多大な助成を頂いた青森銀行の関係者に感謝するとともに、学内の諸先生のご理解・ご協力に感謝し、今後ともわれわれ研究グループ



第八十七回弘前医学会総会

―三沢市で盛大に開催される―

弘前医学会庶務幹事 木村 博 人(歯科口腔外科学講座教授)

平成十五年六月十四日(土)、三沢市に於いて第八十七回弘前医学会総会が石井淳夫先生(上三三医師会々長)を総会長として開催された。会場の三沢市公会堂は市内の中心部、三沢市役所の傍にあり非常に立派な施設であった。総会は弘前医学会と上三三医師会の共催であるが、会場の設営、広報活動、懇親会など学会開催の準備には石井淳夫総会長、市立三沢病院々長坂田 優先生(集會幹事)ならびに上三三医師会の諸先生の全面的な御協力を頂いたことを本紙面を借りて改めて感謝申し上げます。

総会に先立ち弘前医学会評議員会が学内評議員八名、学外評議員七名の出席の下に開催された。始めに菅原和夫弘前医学会会長と石井淳夫総会長から挨拶があり



座長 下北医師会、新集會幹事として榊田忠巳(むつ下北医師会)、新監事として千田龍芳(むつ下北医師会)の各先生が就任することとなった。

第八十七回弘前医学会総会ならびに一般演題発表は三沢市公会堂三階にある第八・九集會室で開催された。総会終了後、学内外から十二題の口演発表があったが、上三三医師会の山中幸磨先生、坂田



優先生、工藤祐喜先生、神 雅彦先生には座長ばかりでなく「弘前医学会賞優秀発表賞」の審査委員も務めて頂いた。口演発表終了後、学内の三名の評議員を加えた七名の審査委員が別室に集まり、坂田先生を審査委員長に選任した後、優秀発表賞の選考を行った。十二演題共に甲乙付け難い発表ではあったが、発表内容が臨床に直結しインパクトが大きいことやパワーポイントに動画を盛り込んだ斬新なプレゼンテーションであったこと等が評価され、栄えある第一回目の優秀発表賞は、「手指狭窄性腱鞘炎に対する鏡視下腱鞘切開術の経験」を発表した成田俊介先生(むつ総合病院整形外科)に授与することとなった。

学会賞選考と併行して地下一階の小ホールにおいて、弘前医学会市民公開講座として「更年期をどう過ごすか? 健やかな老後をめざして」という演題で産科婦人科学講座水沼英樹教授が一般市民を対象に講演された。座長はすみれクリニック院長西岡卓郎先生が努められた。当日は生憎の小雨混じりの天気であったにもかかわらず、会場には「更年期」に関心を持つ百名を超える多数の三沢市民が集まり最後まで熱心に聴講していた。弘前医学会総会での市民公開講座は、「地域に開かれ地域と共に歩む弘前大学」の社会活動の一環であるが、初めての試みであったにもかかわらず大盛況であったことは、三沢市役所、三沢市立病院を始めとする関係各位の御協力の賜物と改めて感謝申し上げる次第です。公開講座終了後の和やかな質疑応答に引き続き、優秀発表賞の表彰式が執り行われたが、成田先生には一般市民からも大きな拍手が寄せられたのが印象的であった。

全ての総会行事が終了後、同公会堂に於いて懇親会が開催された。食べ切れない程のご馳走が並ぶ中、参加者全員が今回の総会の成功を讃え合い、次年度も本年度以上に盛会となることを祈念しつつ無事に全日程を終え散会となった。関係者のご挨拶の中で、料理等をご注文した三沢市の「きざん三沢」が数日前に不慮の火災に遭遇し幹事は冷や汗を掻いたという苦話も紹介された。

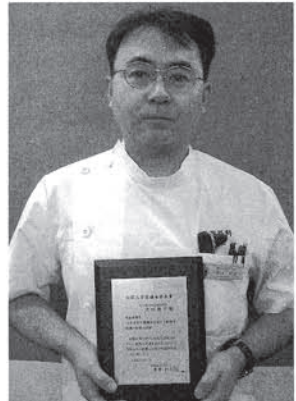


最後に、本学会開催に際し全面的に御支援を頂いた上三三医師会、三沢市立三沢病院職員の方々ならびに多くの関係者の方々に對して、改めて深甚なる感謝の意を表します。

この度、図らずも第八十七回弘前医学会総会で第一回目の優秀発表賞を受賞することができ、とても有り難く関係各位にお礼を申し上げます。

演題名は、「手指狭窄性腱鞘炎に対する鏡視下腱鞘切開術の経験」です。内容はいわゆるバネ指の手術を鏡視下に低侵襲に行う新しい治療法の紹介と臨床成績を従来からの方法と比較してまとめたものです。最大の利点は従来の手術方法と比較して早期に水を使う仕事に復帰できる点です。バネ指は中高年の女性に多い疾患であるため、家事に

早くから復帰できるということは大きな利点と考えます。本年春に新聞記事でこの手術を行っている全国の病院として青森県では弘前大学付属病院と当院が紹介されましたが、それ以来下北地域外から来院される患者さんや、県外からの電話での問い合わせがあり、今後も微力ながら専心職務に精進いたしたく存じます。



弘前医学会優秀発表賞をいただいて

むつ総合病院整形外科 成田 俊介

動物実験施設ニュース

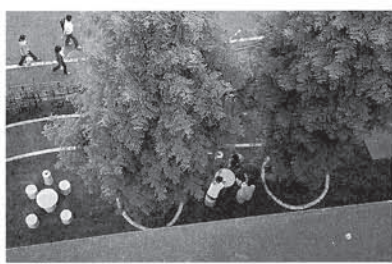
動物実験施設長 蔵田 潔(第二生理学教授)

動物実験施設で最近ふたつの動きがあったので、この欄を借りて利用者を含めた学内の皆様にお知らせしたい。

一、建物の概算要求について
来年度から国立大学が法人化されることが決定されて

たが、それにとりなって従来のような概算要求が文部科学省に対してできるのは今年度が最終年度となる。このことに関連し、基礎校舎の改修が昨年度から概算要求されているが、今年度になって動物実験施設の一部増築が概算要求されることになった。私もこの話があるまで気が付かなかったのだが、動物実験施設の建物は南東の一角が柱だけになっっている(写真参照)。この部分はいわば死角になっているので、まだ気の付いていない人も多いのではないかと思います。恐らくこの部分は建設当時、工費の一部が減額されたことにより現状のようになってい

二、実験用ウサギの導入について
本施設ではこれまで福島県の生産業者から実験用ウサギを購入していたが、その生産業者が高齢のため廃業してしまい、代わりの業者を探さざるを得なくなっていた。これまで納入されていた実験用ウサギは安価かつ良質なものであったが、品質を従来どおりかそれ以上のものを手配しようとする、新たに入手可能なものは従来より価格が高くならざるを得ないことが判明した。また、余りにも遠方の業者からは搬送に時間がかかりすぎるため不可であること、もうひとつの大きな問題は、実験動物を搬送する運送業者が極めて限られることである。これらの諸条件をクリアすると、どうしても実験用ウサギの単価が上がりざるを得ない。ウサギを実験に用いられている利用者には新たな負担をいただくことになり、大変心苦しいが、どうかご理解をいただきたい。



臨床研究棟7階より



臨床研究棟西口より

臨床研究棟西口脇に小公園完成

雪解けを待つ臨床研究棟西口脇の敷地がこの春、小公園として造成され学生や職員の新しい憩いのスポットとなっている。従来自転車が多数駐輪していたスペースを並木と道路と芝生で小さいながらも落ち着いた雰囲気

ので、暑い日でも木陰には涼しさが宿るアカデミックなスペースを提供している。また健康増進法の施行により医学部全館が禁煙となったこともあり、講義の合間に喫煙を楽しむ学生もみられる。(中澤 記)

臨床試験・研究等の 倫理審査申請についてのお知らせ

弘前大学医学部倫理委員会 委員長 泉 井

亮(生理学第一講座教授)

臨床試験・研究倫理審査申請書記載内容

表書き（宛先（医学部長または附属病院長）、倫理審査申請書の表記、申請年月日、申請者所属・氏名（印）、所属代表者氏名（印））について、以下の項目について記載してください。

1. 臨床試験・研究課題名
2. 本課題の目的
(簡明に記す)
3. 研究期間
(研究開始から終了予定期日を記す)
4. 共同研究者の有無（有・無）
所属・職・氏名
(学外研究者が含まれる場合は共同研究承諾書が必要)
5. 本課題の概要・背景および医学・医療における意義
(本試験・研究の実施にいたる経緯、本試験・研究を取り巻く状況、本試験・研究課題を遂行し、結果を得ることが医学・医療にどのように貢献できるかについて記す)
6. 本試験・研究の対象者
(試験・研究の対象とする患者の氏名、年齢、疾患名、人数、またはボランティアの人数、年齢等を記す)
7. 本試験・研究対象者の経過、現状
(対象者が特定されており、その経過・現状の把握が重要である場合に記す)
8. 試験・研究の方法
(薬剤の投与方法・量・期間、採血量、組織の摘出量等、具体的に記す)
9. 本課題遂行の危険性および問題が生じた場合の対処
(本課題に関連して被験者に問題が生じた場合に試験・研究実施者はどのように対応するか、医療費等の負担について記す。また、このような場合には、申請者はこのことを附属病院長または医学部長に速やかに報告する義務があることも記す)
10. 余剰検体が生じた場合の取り扱い
(余剰検体の処理について、廃棄等、明確に記す)
11. プライバシーの保護
(試験・研究経過中および終了後の研究発表等で被験者のプライバシーに十分配慮することを記す)
12. 被験者の試験・研究参加同意の自由と途中での参加撤回の自由
(試験・研究への参加が被験者の自由意志で行われること、また一旦同意しても途中でそれを撤回できること、同意参加拒否した場合にも不利益を受けないことを記す)
13. 本試験・研究に関する問い合わせ先
(試験・研究経過中および終了後に被験者（または保護者）が被験者の状態等について問い合わせを行うことができる試験・研究実施者名と連絡先を記す)
14. 経過中および終了後の被験者からのクレームの自由
(試験・研究経過中および終了後に何らかのトラブルが生じた場合に、被験者が試験・研究責任者（申請者）にクレームすることの自由、さらに附属病院長または医学部長に通知することの自由を記す)
15. 参考文献
(数編以内、特に重要と思われる文献はコピーして提出する)

補足

- 1) 申請用紙は4ページ以内に収まるようにしてください。
- 2) 他施設との共同研究（依頼）の場合はそのことを「2. 本課題の目的」の中に明記し、依頼等の文書（必要と思われる文書のみ）をコピーして添付してください。
- 3) 申請書には本文の他に、被験者への説明書（試験・研究への参加のお願い）と参加同意書の様式（いずれも様式例を示しています）を添付してもらいます。
- 4) 不明な点は倫理委員会事務担当（内線6461須田）にお問い合わせください。

二、生殖医療

- ① 申請書（書式あり）を提出する。② これ以降は上記と同じ。③ その他、倫理審査に係る事項について。④ 倫理審査に要する日数。⑤ ドナーへの説明書（必要があれば）。⑥ ドナーの同意書（必要があれば）。⑦ 倫理審査に要する日数。⑧ 倫理審査に要する日数。⑨ 倫理審査に要する日数。⑩ 倫理審査に要する日数。

付2

このたび、工藤一前委員長の後任として倫理委員会委員長を務めることになりました泉井（わくい）です。どうぞよろしくお願いいたします。

さて、医学研究の発展にともない、臨床試験・研究や治療法等が倫理的・社会的に問題となったり、その心配のあるケースが増加しております。また、研究内容の透明性を求める社会の声も高くなっています。

このような問題を未然に防止するために、そして社会の医学研究に対する心配に対処するために、本学部内で実施される臨床試験・研究等に対して医学部倫理委員会は倫理審査を行っています。

しかしこれまで、倫理審査申請の仕方がわからない、審査結果がでるまでに時間がかり過ぎる等の不満が聞かれました。そこで、倫理委員会（付3参照）では、審査申請や審査の流れについて整理し、また申請書の様式も作成しました。倫理

審査を受けることが義務付けられている研究等は勿論のこと、倫理面での検討が必要と思われるもの、あるいは倫理面でのチェックを受けておいた方が無難と思われる試験・研究におきましては、どうぞ臨床試験・研究倫理審査申請書記載内容（付2）にしたがって審査申請してください。

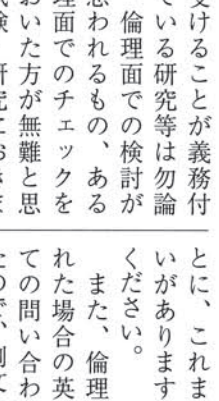
なお、臨床試験・研究や治療等実施の責任体制を明確にすること、申請書の内容に被験者保護に一步踏み込んだ対応を求めていること、臨床試験・研究を行う場合、疾病の発生機構や診断法、治療法の開発を目的とする試験・研究で、①その疾患に使用許可されている薬剤以外の薬剤を試験的に人体

（患者さん、ボランティア）に投与する場合、②新たな器具を試験的に用いる場合、③新たな物理的処置を試験的にする場合、④これらの処置の有無に関わらず、採取した検体を用いて研究を行う場合。二、生殖医療を実施する場合、三、臓器移植医療を実施する場合、四、その他（一）どこへ申請し、申請後はどのように審査されるか（審査の流れ、付1参照）一、臨床試験・研究の場合①申請書の提出

理委員長から申請者に直接問い合わせます。②新しい治療法への取り組み等については、倫理委員会です申請者から説明していただく場合があります。③再審査（再提出）を要する場合は倫理委員長より申請者に直接連絡します。

付1

臨床試験・研究、生殖医療、臓器移植医療等の倫理審査の流れ



- 注1: 申請書類は倫理委員会事務担当に提出してください。
注2: 倫理委員会で申請者より説明していただくこともあります。
注3: 再審査を要する場合は倫理委員長より直接、申請者に連絡します。
注4: 倫理委員会で最終審査結果を報告します。
注5: 医学部長または附属病院長より申請者に通知します。

②申請書を倫理委員会事務担当に提出する。③このとき、提出先を、医学部医学科および保健学科教官、大学院学生は医学部長とし、医学部附属病院教官・職員は附属病院長とする。

④倫理委員長または附属病院長から倫理委員会へ倫理審査依頼

⑤医学部長または附属病院長から申請者に直接問い合わせます。

①申請方法は産科婦人科学講座および附属病院産科婦人科にのみ通知

②レシピエント（または保護者）への説明書

付3

弘前大学医学部倫理委員会委員名簿

(平成15年4月1日現在)

倫理委員

- 基礎医学系教授(2名)
泉井 亮(委員長、生理学第一講座)
中根 明夫(細菌学講座)
臨床医学系教授(2名)
奥村 謙(内科学第二講座)
兼子 直(神経精神医学講座)
保健学科教授(2名)
大串 靖子(基礎看護学)
三浦 秀春(基礎作業療法学)
法医学教授(役職指定)
黒田 直人(法医学)
医学部附属病院医薬品等臨床研究審査委員長(役職指定)
元村 成(薬理学講座教授)
基礎教官会議(1名)
相澤 寛(生理学第二講座助教授)
臨床科医師代表者会議(1名)
小田桐弘毅(第二外科講師)
学部内専門委員(1名)
小林 朱美(看護部副看護部長)
学内専門委員(2名)
五十嵐靖彦(人文学部思想文芸教授)
堀内 健志(人文学部公共政策教授)
学外専門委員(2名)
三浦 義弘(盛雲院住職)
三上 雅通(三上法律事務所弁護士)

事務担当

須田 誠一(総務課庶務係)

北日本病院懇親野球大会とその背景

帷子 康雄

今年、北日本病院懇親野球大会は、第四十五回を迎え、むつ総合病院がときわ会病院を五対四で破り、三十年ぶり、二度目の優勝を飾った。

この四十五年間、私は、時々所属チームが変わったが、まだ弘前ドクターズに投手として登録されているので、前夜祭に出席したところ、会長佐々木教授から、昔のことを、何か書くようにとのご指名を頂いてしまった。

第三十回記念大会の際、本大会の歩みは、医学部の側面史ともいえると、吉田豊前学長が述べておられるが、本大会の誕生は、医局の存在があたり前のことと、受取られていた時代である。当時、各地の病院に大学から赴任した往年の医局野球の名選手の勇姿を、もう一度南郷グラウンドで見たい、という雰囲気が高く、各選手が赴任先の病院チームを引きつれて、弘前に来ることは、病院職員の間とまりは勿論、各病院間の親睦、交流に役立ち、青森県の医療のため資するところが大きいのではないかと、ということなどが松永教授、横教授の間で話し合われ、教授会にも報告があり、医学部から教授団と医局代表チームを参加させることが承認され、第一回大会が昭和三十四年八月に行われた。

津軽地区病院



優勝旗（津軽地方病院野球大会）
第一内科教授室にて

親善野球大会として発足したが、第三回に秋田県（米内沢、花岡鉦山、中通）から参加申込みがあり、北奥羽地区病院親善野球大会と称し、第四回からは、北奥羽地区病院親睦野球大会となった。昭和四十三年第十回記念大会には、岩手県（紫波、西根）と北海道（函館渡辺）からの参加があったので、翌四十四年、北日本病院懇親野球連盟が結成され、第十一回から北日本病院懇親野球大会と改称、優勝旗も新調された。なお、昭和三十八年第五回大会までは、津軽地方の各医師会、歯科医師会、弘前野球協会との共催であり、優勝旗は、第六回のとき、中外製薬から寄贈され、最高殊勲賞、最優秀投手賞、打撃賞などの個人賞は松永教授の色紙であった。

参加チームが増えるに従って、球場確保と日程消化が問題となった。当初は、二球場（南郷、弘前公園内市営）、土・日二日の日程で行われたが（第一回参加チーム）、第四回大会から三日となり、参加チームも第六回二十一チーム、第十回三十四チーム、第二十回では遂に四十チームに達し、病院という特殊事情を考慮すれば、球場を増やし、天候は殆ど無視して、三日間の強行スケジュールを断行せざるを得ない、ということになった。現在、南郷、運動公園、河西体育センター、附属小・中、弘高、東奥義塾、学園町の八球場が使用されているが、これまでも世話になった球場は、教養部、南高校、工業高校、桔梗野小、第二大成小、一中、三中、四中、五中、実業高校、電波高校、着物センター、河川敷、小沢市民、相馬村、浪岡町立、航空電子、運動公園多目的、大鰐、岩木山、加藤川、板柳高校各グラウンドと、極めて多数に上っている。

なお、本大会の甲子園ともいべき南郷グラウンドは、市有地であったが、松永教授が昭和二十六年頃から当時の弘前市長と交渉を続けられ、藤森市長の昭和三十一年七月、正式に大学移管となったのである。本大会において、グラウンドの熱戦と並んで重要な意義を有するのが懇親会である。昭和五十一年までは、百石町ニューヒコ、駅前りんご商工会館、白樺、時には医学部生協食堂で大会初日試合終了後、夕方から行われていたが、診療等のため早く帰らねばならない、遠来のチームもあり、昭和五十八年第二十五回記念大会から、現在のような前夜祭（開会式・懇親会）として定着し、昭和二十五年以降、中国大飯店、パレス瑞祥、ホテルニューキャッスル、シティ弘前ホテルが会場となっている。

大会実施に当たっては、弘前審判協会のご協力に負うところが極めて大きく、球場、試合数がふえるに従い、第十九回から黒石、浪岡両審判協会（その後、南黒支部、北郡支部）の応援を得て、現在に至っている。グラウンド整備、ライニング等には、昭和五十年頃まで、という（第一、二回は参加申込みの受付も）、サンケイ、中島各スポーツ店に依頼していたが、参加チームの増加により大会は、一層盛上りがつて来たが、案内状、参加要項等の発送、球場の交渉、審判協会との打合せからお天気心配まで、一手に引受けていた各科の実務責任者（実行委員）のご苦労は、並大抵のものではなかった。漸く、昭和四十一年から大会準備委員会が設けられ、昭和四十九年から大会運営委員会と改称し、連盟に事務局が正式に設置された。歴代の実務担当は、第一内科、第二外科、皮膚科、整形外科で、昭和五十年以降委員は、学内委員、学外委員（医師会代表、勤務医代表）より構成され、昭和五十八年、副会長二人制とし、昭和六十年委員は、運営委員会役員と改称され、医学部教授全員を顧問にお願いすることになった。次に、参加料等については、第一、二回千円、懇親会費一人五百円であったが、次第に値上がりして、第十一、十三回参加費一万円・懇親会三千円（チーム）、第十四回から連盟年会費として、二万円、第十七回二万五千円、第二十二回から五万円、そして平成に入ってから、七万円、平成十三年五万円に減額されたが、十四年から再び七万円という経過である。

さて、この辺で、教授団の戦績につれて触れてみると、記念すべき第一回大会の対戦相手は、弘前市立病院連合、昭和三十四年八月二十二日（土）午後三時プレイ。当時の教授会第二、第四土曜午後一時からであったが、佐藤昭医学部長のご配慮により教授会は一時間で切上げ、次のメンバーで勇躍、南郷グラウンドに向かった。エース横教授を外遊で欠いた、松永教授苦心の打順は、一（赤石）（遊）、二（佐々木）（三）、三（照井）（中）、四（品川）（左）、五（入野田）（二）、六（荒川）（二）、七（東野）（右）、八（篠崎）（捕）、九（帷子）（投）。荒川教授四回頃ベンチに下り、セカンド東野教授、ライト水平教授の布陣となったが、結果は最終回長打を浴び七対八で逆転負けであった。その後、本大会では、教授団に一回戦で勝ったチームが優勝する、とか、教授団に負けるのも医師獲得の一策、など出所不明の噂が流れているというところを某教授から伺ったこと等が思い出される。補強選手に支えられ、連続出場を続けている成績は、必ずしも芳しいものではなく、勝利投手は、この四十五年間に品川教授三勝、佐藤清美教授二勝、横山教授一勝、八木橋教授一勝、元村教授一勝を数えるのみである。

最後に、歴代会長と歴代優勝チームを挙げると、初代会長横哲夫（第一、二回）、二代松永藤雄（第三、十六回）、三代帷子康雄（第十七回、二十七回）、四代吉田豊（第二十八、三十七回）、五代横山 雄（第三十八、四十一回）、六代原田征行（第四十二回）、七代佐々木睦男（第四十三回）。優勝チームは、十和田市立中央七回、弘大整形外科五回、浪岡町立四回、国立弘前、弘大第二外科、弘前ドクターズ各三回、青森労災、能代永沢、白生会胃腸、むつ総合各二回。板柳中央、黒石市立、西北中央、公立野辺地、函館渡辺、黎明郷、公立米内沢、八戸市民、鶴田町立、大館市立、ときわ会、中通総合、公立七戸各一回の計二十三チームである。以上、本大会の四十五年を大ざっぱに



第20回大会（昭和53年8月8日）始球式
投手 斎藤茂（副会長）、捕手 帷子康雄（会長）
打者 松永藤雄（名誉会長）

さて、このたびお届けいたしました医学部ウォーカー第二十六号はいかがでしたでしょうか。大学院改革に関する医学部長の寄稿をはじめ、「チュートリアル」「ジャマイカ」「アルジェリア」などの海外情報、さらには「動物実験施設ニュース」といった新たな企画を含め、今回も紙面いっぱい活用した豊富な内容です。現在、弘前大学医学部において模索中の教育改革が少しずつ推進している様子を、本医学部ウォーカーから感じ取っていただければ幸いです。（高垣 記）

二〇〇三年も早いもので七月も終わり、八月に入りました。夏の夜空を焦がす弘前ねぶた祭りが始まっているのにもかかわらず、今年はまだ「冷夏」と呼ぶにふさわしい、涼しいと言うよりはむしろ寒い日が多い夏で、講義のない今、研究室で仕事をすることは快適です。夏の暑さを象徴する油蟬の大合唱を聞くことなく、秋の到来があるかも知れません。

編集後記

配置換（15・8・1）
神経科 講師
岩佐 博人（医学部 講師）
採用（15・8・16）
麻酔科 助手
櫛方 哲也（医員）
辞職（15・8・31）
脳神経外科 助手
田畑 英史（二関病院）
採用（15・9・1）
脳神経外科 助手
浅野研一郎（仙台東脳神経外科病院）

人事異動

●医学部医学科
辞職（15・6・30）
薬理学 助手
中尾 美貴
採用（15・7・1）
薬理学 助手
樋熊 拓未（附属病院医員）
昇任（15・7・1）
神経精神医学 講師
岡田 元宏（医学部助手）
辞職（15・7・31）
産科婦人科学 講師
丸山 英俊（むつ総合病院）
昇任（15・8・1）
神経精神医学 助教授
矢部 博興（附属病院講師）
辞職（15・8・31）
神経統御部門 教授
松永 宗雄
●附属病院
辞職（15・6・30）
神経科 講師
天保 英明（順天堂大学医学部）
採用（15・7・1）
神経科 講師
書間 臣治（桜田病院）
辞職（15・7・31）
眼科 助手
渡部永利子（秋田労災病院）



第11回大会（昭和44年）
閉会式（優勝：函館渡辺病院）